

ぶれない心

小見川香代子

慣れない土地に根付くこと、そこにはどれほどの勇気が必要だろう。

医師らしくなく、医師らしくもあり、その雰囲気と、「苦勞」を感じさせない話し方がとてもなじみやすく、親しみやすい。

染まりやすく染まりにくい、そんな印象を受ける。

慣れない土地には多くの壁が立ち上がる。

特に都会のような、人に対して無関心な地域と違い、地方には古い因習があり、新しい物や人に対する関心は排他的になりやすい。退職を期に地方に移り住む人たちと、もともとその土地にいる人たちの諍いは多いと聞く。

医師という職業は強みだと言われたが、その通りだと思う。

それ以上に、「よそ者はよそ者のままだいることがよい」という言葉に驚かされた。

私には、その発想はなかった。

地域とのかかわりの中で「歴史をつなぐ」という言葉は、興味深い。

今をつなげる事は出来ても、歴史をつなげるという発想は私にとっては目から鱗の言葉だった。そして思いきり、うなづくことの出来ることだった。

「最初の目的」、そこがぶれてしまうと到達点に達することが出来ないと言う。強い意志がないと流されてしまう。

福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結ぶ会でも話しておられた「だまさない・ごまかさない」と言うこと、徹底して本人と話すということにはとても強さを感じた。

「逃げるなよ」といわれ、逃げなかったことの秘訣はそこにあるのかもしれないと思う。柔らかい話し方の中に、ドンと肝の据わった強さを感じた。

「それでもやっぱり、ここで呆けたい」

人や土地への愛着、強く結びつくわけではなく、ゆるくすぎるわけでもなく、ほどほどな関係性の中であって、それでいて強い思いを秘めている……そんな印象をこの言葉の中に受け止めた。

「医療者と患者」「医療と福祉」その関係性の中にもこのゆるい関係は必要なのかもしれない。

私も薬剤師として医療者の一端を担うものとして異職種の中に入って、多くの矛盾や挫折を繰り返してきた。ゆるく結びつくこと、自分の意思はぶれないこと……とても必要なことだと思う。

人から人へと続く歴史は、時間の流れと共にかたちをかえながらも、未来に向かってまた同じように伝わって行くのだろう。

冒頭に映してくださった美しく穏やかな自然はいつまでも変わらないように……